

## 図書館の思い出

— 素人図書館長の記 —

### 一 図書館長は三人

図書館長といっても、私の場合は昭和三十五年四月から翌三十六年三月までのわずか一カ年であり、それもまったくのズブの素人図書館長であり、遂に素人図書館長に終わったので、記すことは、落第図書館長の記とでもいうべきである。ただ、当時、私と同年の川崎君という図書館の主のような事務長がおり、一級上の本の虫、本好きで図書館にいてくれた、『時計の歴史』の著者でもある山口幹事や、図書館学、書誌学の専門家がそろっており、この点では心配はなかった。しかし、それに劣らぬ図書館のことに熱心というか、素人図書館長のことを心配して下さったのが、私の前任の図書館長でもあり、その前にも図書館長の任にあった友人図書館長であった村松恒一郎教授と、附属図書館長が官制化された最初の、また最も長く図書館長の任にあった、蒐集マニアでもある、高垣寅次郎名誉教授のお二人があった。このお二人は、閑(?)にまかせてしよっ中、図書館に來られ、いろいろ教えてくれたり、文句をいった

高橋泰藏

りしたのは村松前図書館長であり、「これはどうして持ち込まれた書物か」ときくと、たいてい「それは高垣先生が一橋の図書館へ持って行けといわれたものです」と、珍しい書物ではあるが、しかし高価なと思う書物が古本屋から持ち込まれたことが、しばしばであった。一橋の図書館、素人図書館長を憂え、助けるためのことであり、ありがたく思ったのだった。館員諸君と話したことであったが、少なくとも私のときには「図書館長は三人いる」というのが定説(?)になっていた。こういうことが、人文系、社会学科系の大学にとって重要な意味をもつ図書館を充実させたのだった。もっと遡れば、館長制が官制化される前、図書館主幹時代に、蔵書の充実に専念せられたのは故三浦新七先生であるらしい。先生は、ご自分で蔵書カードを書いていられたらしく、その頃の桐材製のカード箱や、先生の筆蹟と思われる、右肩下り加減の特徴のあるカードが残っているのに驚いたのだった。——このことについては、ほかに書く方もいられると思うが、主幹(館長)自らカードを書いていられた、というようなことは、驚くべきことであり、他に例をみないことであろうと、以てそのご熱心さを語るものであると思うので、あえて記しておくこととする。ついでにといつては申し訳ないが、記しておけば、世界に冠たる「メンガー文庫」、「ギールケ文庫」等々の購入を決断された当時の佐野学長は、本学図書館の基礎を築いた人というべきであり、現地にあって、その衝に当たられた諸先生はもとより、この購入の資金的援助をされた先輩各位の先見の明に、深く感謝の意を表すべきであろう。この経緯については誤解もあると聞くが、実際に購入に当たられた大塚先生、孫田先生の書かれたものがある。

## 二 「メンガー文庫」の残部の整理作業

「メンガー文庫」のカタログは、既に一九二六年に印行されたが、いわば「雑」の部類として未整理のまま残され

たものがあつた。この部分はいつかは整理され、その(Ⅱ)として印行されることが前提されているものであつた。この作業は村松図書館長時代に行なわれたものであるが、どういふ風の吹き回しか、私に廻つて来た。もちろん素人の私の手におえることではなく、三人ほどの図書館員諸君を相談相手、というと聞かえはよいが、実は私はいわばシャッポの形で、書誌学の術語も知らずに引き受ける破目になつた。実際に整理にあつた諸君の話を聞いているうちに、大部勉強になつたが、そのとき発見され、困つたことは、前の整理のとき、この「文庫」を入手して急いで整理し、刊行する必要のあつたであろうし、また寄贈者(資金の拠出者)に対しての礼儀ということもあつたようであるし、さらにはメンガー自身の整理方法のせいもあつたであろうが、いくつかの雑誌論文のうち、重要と思われるものを集めて一冊としたものが、かなり多くあり、その最初の論文の表題がそのままに、その冊の表題として整理されていたことを発見したことである。そのために、作業は思ひの外に厄介なことになり、この第二部の「目録」には、最初の「目録」と第二部を通しての「エラータ」と「インデックス」が総頁数、三三〇頁余のうち、そのなかば近くになることとなつた。ついでに記せば、第一部に掲げられてよいと思われるメンガーの肖像画——それは時を経るに従つて異なるものであつたが——や、メンガーが人名簿を利用した『書物購入控帖』とでもいふべきものが、経済学その他に分けて三冊あり、この『書物購入控帖』には、そのあるものについては、どこで、いくらで購入したかも書き入れたものがあり、また、この『購入控帖』には、これを失つた場合に備えて、その拾得者への謝礼金とアドレスとが、そのタイトル・ページに書き込まれており、それによると、少なくとも二回転居したことが記されており、拾得者への謝礼金も増額されている。大変興味あることに思い、『目録』の第二部(一九五五年刊行)にはこれらのものを写真版にして掲げ、解説をつけることとした。その『目録』の最初の作製に当たつた村松さんに、そのことを話したところ、やはり、事情上、何分にも急ぐ必要があつたのだ、ということであつた。ただ、私が今でも気にかかつているこ

とは、そのかなりの部数を、内外国の大学図書館、研究所に寄贈していることではあり、この二つの『目録』を通じて正確なものを作製し、印行することである。

### 三 メンガー『原理』の手書き入れ本とカウダー博士のこと

右に記したことと関連することであるが、メンガーの手書き入れ本の『原理』(*Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, 1871)には、一頁おきにブランク・ペーパーが挿入してあり——その表題には原題が消され、"Allgemeine theoretische Wirtschaftslehre"と書き改めてある——このブランク・ペーパーのみでなく、本文頁にもわたって、独、英、仏はもちろん、ラテン語等で、美しい文字での書き入れが見られる。これを読みうるようになることは、とうてい不可能なので、村松前図書館長の発意で、これらの語学に通じており、しかもオーストリア学派を研究しているカウダー博士(Dr. Emil Kauder)を昭和三十五年から翌三十六年まで本学に招聘して、その解説を委嘱したのだった。この表題については議論を重ねた結果、"Carl Mengers Zusätze zu Grundsätze der Volkswirtschaftslehre"とすることとして、日、独文の序文とカウダー博士による独、英文の緒言を加え、一九六一年に印行して、内外の大学、研究所に贈り、大方の批判を乞うこととした。この書き入れ本は、世界に一部のみ存在するものだからであるが、この作業については、図書館員の山口、川崎、岡崎の諸氏のほか、ラテン語については渡辺金一教授、カウダー夫人の助力を得た(なお、「メンガー文庫」の中にあるラウの『原理』についても、メンガーの書き入れのあることが発見され、これについては山田雄三教授(元図書館長)が、これに当たられたので、別に詳細に述べられている)。

## 四 書庫増築問題

昭和五年に、いまの国立の地に全校舎が移ったとき、図書館の収納能力は二、三十年保つように企画されたりし、川崎君が、その企画に当たったと聞いたが、不幸にも第二次大戦のために、外国の書物の輸入もできず、日本の書物もいわゆる仙花紙による時代で、新刊本も多くはなかった。そのお蔭というべきか、どうにか購入書を収納しえたが、外書の輸入ができるようになると、とうてい本来の書庫に収納しえないようになって、私の口癖になった「書庫にあらざるところ」に積み重ねる有様になった（幸い、大正十二年の関東大震災のときにも、図書館だけは類焼を免れ、蔵書は全て国立の新図書館に移すことができたのだが、その時の館員諸氏の苦勞は察するに余りあるものがある。いま一つの思い出は、左右田先生が亡くなられて、その御蔵書を大学にいただくことになって、何日かかっただか記憶は明らかでないが、毎日トラックで、当時の助教、助手の方々のお手伝いをして大学に運んだことである。これらはいずれも国立の新図書館に移る前のことである）。

ところで、新図書館は、二、三十年は保つ——収納しうる計画であつたらしいが、それでも、さらに増築しうるように計画されていたのであつた。それが、前記のような事情で、昭和三十年頃には、既に書庫は狭隘となつていた。ところが文部省では、比率は忘れたが、学生一人当り何坪という書庫の大きさの基準があるらしく、幾度要求を出しても認められず、在任中は遂に実現することができずに終り、館員諸君からは、他の建物ばかりに熱心だという文句に逢つて、いわば板ばさみになり、これには私も困つたのだつた。図書館長を辞してからであつたが、幸か不幸か、ある旧制の国立大学で、移転間に火災を起こして、化学関係の貴重な資料を焼失したことを知って、早速、文部省

へ行って、自分のところでは「書庫にあらざるところ」に書物を積んである、万一の場合のあったとき、責任を負えぬ旨を強く申し込んで、ようやく、かねて企画していたところへ書庫の増築を認めて貰ったのであった。しかしそれでも、お役所の坪当り単価では貴重な書物を収める設備はできないので、せめて四階建のうち一階でも、これに応わしい設備にしたいと考え、卒業生の拠金で作られている「一橋大学後援会」をお願いして、この不足分を補い、特殊の設備をすることができて、「メンガー文庫」「ギールケ文庫」「左右田文庫」などを納めることとした。この間、これらの貴重な「文庫」を移した館員諸君の労苦は大変なものであった。このきっかけとなったのは、先に記した化学関係の資料の焼失ではあったが、人文科学、社会科学関係については、人材はもとよりのことであるが、図書・文献の充実——これを整備する何人かの司書、専門家、理想的にはドキュメンテーション・センターを設けること——と、それを収める図書館の設備の大切であることを、きわめて短期間ではあったが、その衝に当たった者の感想であり、文部当局の理解を望みたいことである。(昭和五十年六月記)

(元一橋大学長、附属図書館長)